

廃プラスチック商社大手のパナ・ケミカルが「資源プラ」という概念を打ち出した。廃プラから資源プラへと呼び名を変え、廃プラを処理する業者から「資源プラを製造するメーカー」と関連企業やその従業員の意識を変え、ひいては品質の向上にもつなげていくという試み。まずは7日から自社や同社が参画する企業コンソーシアム「プラスチックリサイクルピレッジ」のウェブページで資源プラの情報を公開。さらにポスターを作成して関連業界に配布する。犬飼健太郎社長は「資源プラ」と呼び名を変えることで、プラスチックリサイクルの未来も変えていきたい」と期待を込める。

パナ・ケミカル
製造する
廃プラから資源プラへ

「資源プラ」という提案。
「処理する」ではなく「製造する」へ
「資源プラ」を提案するチラシ

今回の呼び名の提案を始めるにいたった背景に、業界を取り巻く環境の厳しさが増していることが挙げられる。原油価格の下落や中国経済の失速、それによる中国でのパーシンプラの余剰感、さらには中国当局による

リサイクル現場の意欲高める

廃プラ輸入に対する規制の強化などにより、業界の中には存続が危ぶまれる会社が増えているという。国内でリレットするにも一定のコストがかかるが、中国から極めて安価なパーシンプラが流入するなか、国内の廃プラの販売先が縮小していくという現実にはさらされている。輸出については一定の需要規模が存在するものの、汚れが付着しているような材料は引き取り手がなかったり、あっても極めて安価に買い叩かれる傾向がある。

パナ・ケミカルはこうした動きを以前から察知し、「生き残っていくには品質を高めていくしかない」との考えから、2013年にプラスチックリサイクル処理機メーカーの強化などにより、業界の中には存続が危ぶまれる会社が増えているという。国内でリレットするにも一定のコストがかかるが、中国から極めて安価なパーシンプラが流入するなか、国内の廃プラの販売先が縮小していくという現実にはさらされている。輸出については一定の需要規模が存在するものの、汚れが付着しているような材料は引き取り手がなかったり、あっても極めて安価に買い叩かれる傾向がある。

今回、「資源プラ」の呼び名を打ち出したことも、業界の活性化と品質の向上を目的としたものであり、ひいては商品価値の向上にもつなげていくことも期待している。

「資源プラ」という呼び名は、海外に輸出できる商品になる。しかし、そうした商品でも廃プラと呼ばれている。以前、当社の女性社員に「なぜ廃プラと呼ばれるのか」と質問された。例えば紙は古紙と呼ばれ、鉄はスクラップと呼ばれ、鉄はスクラップと